



玉
か
り
束

八

1冊5
34
9



おのりまハの巻

巻の下葉ハ

人吉くささあは下葉もかひもろくはまの
ふぢやもろくはまのふぢやもろくはまの
きやもろくはまのきやもろくはまの
やろくはまのやろくはまの
やろくはまのやろくはまの



細のふぢやもろくはまの
まはみやもろくはまの

さまひのほして又きき

相撲スヒの最手ホテといふの三代実録甲午の巻ふすうりうつ不
御所ミヤうかがはれよしもさひのほしてとり今イマのまふいをも聞
き西宮記の相撲條ふ最手額田成連ホト與ト腋ツキ宇治部利里
決ス勝負とわふ腋を今いふ脇脇し小右記ふも常時腋也と
あり又西宮記はあか丹がふ助手とわふも腋のうりうり江
家治イふさまひのうりいづく廻り特鼻禪上ニ着狩衣テ差紐ツ
とて古今著書系にも烏帽子袴が着るがうりうりうり
アといふうりうりやうりうりうりうりうりうりうりうり
もつらうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり

うきさむらうり裸ハカあふもさうりうりうりうり

うきさむらうりうりうりうりうりうりうりうり

ちうだうりうりうりうりうりうりうりうりうり

まきさむらうりの物うりうりうりうりうりうり

あふもさむらうりうりうりうりうりうりうり

申うりうりうりうりうりうりうりうりうり

うきさむらうりうりうりうりうりうりうり

うきさむらうりうりうりうりうりうりうり

うきさむらうりうりうりうりうりうりうり

うきさむらうりうりうりうりうりうりうり

のまはるの社よりさきさき物ぞそのまはるあふがけにふよりほ
まにゆらぬあの方のうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく
あのを造るいで人をまじつてはふりも又まきばいりわら
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく
ちり倭建命はあはれまはるつぎとわら火よりあはれのかと
火揚命像とまはるのまはるの酒折社のまはるの板乃まはる
りり近き年出まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはる
代の人のまはるまはるのまはるのまはるのまはるのまはるの
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく

くらに赤ふはわらぐ作へまはるのまはるのまはるのまはるの
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく
のまはるの神主飯田氏ふらまはるのまはるのまはるのまはるの
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく
ちひまき本は像の肥後まのまはるのまはるのまはるのまはるの
ちり倭建命はあはれまはるつぎとわら火よりあはれのかと
火揚命像とまはるのまはるの酒折社のまはるの板乃まはる
りり近き年出まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはる
代の人のまはるまはるのまはるのまはるのまはるのまはるの
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく
まはるのうらみもねとたまにあふの國とまはるまきづく

かあまのともまきごう〜。ま〜言ハさつしあ本のさ〜用い〜さ
くハま〜あ〜か〜な〜め〜じ〜も〜を〜た〜う〜く〜あ〜い〜言〜い〜り〜と
〜お〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜中^{ナカラ}間^{コト}あ〜さ〜お〜言〜お〜も〜用い〜さ〜さ
〜あ〜お〜ま〜ぢ〜ひ〜わ〜い〜あ〜さ〜又〜う〜つ〜り〜て〜い〜づ〜り〜て〜い〜づ〜り〜も〜用
い〜り〜お〜を〜言〜お〜本〜お〜より〜て〜うち〜ま〜う〜せ〜し〜申^{ナカラ}間^{コト}あ〜さ〜お〜用い
〜ら〜い〜ぢ〜あ〜し〜又〜さ〜は〜ぢ〜ぢ〜い〜い〜言〜ハ〜今〜お〜後^{コト}お〜い〜毒^{キナンドク}お〜さ〜い
〜お〜お〜用い〜さ〜あ〜言〜お〜ま〜に〜い〜の〜若^{イヒ}ま〜さ〜と〜お〜用い〜て〜ハ〜あ〜が〜り
〜さ〜い〜ら〜わ〜く〜あ〜し〜あ〜お〜言〜を〜も〜お〜ぢ〜ぢ〜い〜ん〜お〜て〜ま〜ぢ〜い〜い〜い
〜お〜用い〜さ〜や〜う〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
〜い〜申^{ナカラ}間^{コト}あ〜さ〜お〜用い〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
〜い〜

長あはれのつぎ五七おと七五さとのり
今お人乃ゆまきおあゆみあぢをま〜いおあ〜く七五七ぬとよ
みほぐ〜おも〜と〜あ〜お〜は〜お〜は〜お〜は〜お〜の〜も〜こ〜び〜さ〜ら〜ふ〜も〜河〜み〜あ
五七ぬとつ〜ま〜を〜七五とつ〜ま〜を〜さ〜ら〜は〜お〜は〜お〜は〜ま〜れ〜し〜さ〜れ
お〜今〜ら〜を〜と〜備^{ヨク}ひ〜り〜も〜河〜の〜中〜お〜お〜七〜く〜と〜ら〜も〜よ〜し〜も〜き〜ら〜ま〜い
お〜お〜お〜お〜今〜集^メより〜り〜ら〜お〜お〜お〜長〜あ〜い〜ぢ〜お〜お〜は〜お〜は〜お〜は〜お〜の
つ〜ぎ〜く〜い〜お〜あ〜く〜七五〜く〜と〜ほ〜き〜く〜ゆ〜り〜今〜け〜き〜ら〜め〜は〜ら〜は〜ま〜い
お〜ら〜い〜さ〜ら〜び〜七五〜く〜と〜よ〜む〜う〜さ〜ら〜り〜より〜て〜さ〜ら〜び〜も〜よ〜ら
〜い〜た〜や〜い〜お〜お〜お〜ゆ〜ら〜お〜は〜ま〜き〜て〜思〜お〜お〜お〜お〜集^メは〜ら〜ら〜より〜て
〜や〜く〜さ〜ら

かゝるつぎなるおとべしとて申おりの今やうといふおとづら
のいのちうに若女^{ナヒビ}信じるうと女しるひとてう後のおとづら
おは向りり七五じきとてう若女しるひとてう五七とほぐく
あゝとてううりりしむをたと集のあゆよりして七五とてう
今もうとてううりりしむをたと集のあゆよりして七五とてう
のまゝとてううりりしむをたと集のあゆよりして七五とてう
後のおとづらとてううりりしむをたと集のあゆよりして七五とてう
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを
の若女おのつりりしむをたと集のあゆよりして七五とてう
ちとてうおとづらとてうおとづらとてうおとづらとてう
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを

おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを
今若人の若女おのつりりしむをたと集のあゆよりして七五とてう
ちとてうおとづらとてうおとづらとてうおとづらとてう
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを
よとてうおとづらとてうおとづらとてうおとづらとてう
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを
おわくハ七五くとほぐくはげきちをえちうとてううりりしむを

のむすぶめいしんりしんかきふつけたてぬをよくとれたるねば
しんぐのいせきとせひかゝるむすぶかていせいのりゆきさるり
ちるちらハうげりねきさびあしわとびせかりじじいばね
しんぐをかゝるきとせわりせき
ちんぐとせよしんぐのむすぶき
うらまよの人のあざとみぞとせえつしむかへりか
せあふこといほどくふあふりあせきとせいふさや
がゆらゆらちまじかしてたぐきせおくそひい
かきとらぬ思へを後のせあしんぐとせしんぐとせ
うらまよのあざとみぞとせえつしむかへりか

しんぐのあけきせいしんぐとせいしんぐとせいしんぐとせ
あせばましとせしんぐとせしんぐとせしんぐとせ
むすぶあざとみぞとせえつしむかへりか
ねんせいとせいしんぐとせいしんぐとせいしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
しんぐとせいしんぐとせいしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ
あせしんぐとせあせしんぐとせあせしんぐとせ

何れをべし。これに此言はまがたけりしむいふごひえび
まがむもくもかたてくれを^{てんか}比校へりしむ先づけり
べきは、書故りしむせんともうまもしひきまかすそのま使ふ
例りしむかきとほしむとちうきあぬ古まはちし
かた文りしむ河がぬへりしむあきまが例もよ
しむまきみどりてしむまきまがらぬのこしむ文ふ
かきまきしむしむしむてしむあきまがらぬのこしむ文ふ
あかかたぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ
あきのしむあきまがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ
を後のま者そのあきまがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ

かの大人乃書けりしむをゆくりぬりしむあきまがらぬのこしむ文ふ
ゆくりぬりしむあきまがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ
あきまがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ
あきまがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ

兄^{スヤ}長いせんやハツあきまがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ
宝物集にヤさんや十六史をやいしんや金銀をやと大佛の
まがらぬへりしむあきまがらぬのこしむ文ふ

用捨

ゆるまてしむ俗ふ用捨まるといふち白氏文集の中の文ふ

若^レ違^ヒ命^ニ執^ス迷^ヒ則^チ罔^ク有^ル容^ナ捨^スとつるごとく全く捨つるに
とつるごとく此字形をべし用字法かく用字と捨るととつる
用捨と捨つるつるつる

花の
葉花の枝、葉、花、とくなく、屏風、几帳、をかんま、むきつ、
後、むきつ、とくなく、わたりとまり、局^余とつる、つがやう、は、
とつる、の、つ、つ、

梅詞

た又月日などいさむとつる、むきつ、とつる、つ、
とつる、あ、むきつ、の、つ、つ、乃、詞、を、よ、梅、詞、といふ、

此名梅、つ、ハ、つ、も、つ、中、昔、は、あ、つ、つ、つ、つ、
梅、つ、と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
あ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
あ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
の、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
梅、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
の、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

事已住老よりか子孫ふ何津新に多隆業といひ人乃
るし天文六年ふ此西より生れ後ふ對るふを老る此傳の
詩文の集仙巢稿といふ長十六年十二月廿二日ふ七十五
ふしはしぬあしみまかつるとかの流子續風出記ふ
かんるまんをいんぐりみんあま

假字をかんるといふ也いふ字押まんねといふはむがこなり
かふかりをかりね、統むそのまをき使りんといひむがかん
ねといふもいふまんといふべきふをかりなりそまか
んるかゆへへゆかりねいぼまあかんをまへるりあま
又南をみんあまといふもむがここといふんぐりにあま

むろいざりふんとままむいんぐりいりまるといむ
あまそのむを傳のき使りんといふんかむまむそのあま
かを傳るい伝しゆまふみまといふんまるといふまきよりねし
そとくき使りんとを伝すいふまるとまきむと此まんるみ
んねまを例し、ちりていんるいんぐりまらひまみだ
まがとねりか

男は名ふも某子といふも
中若よりいれく女名より某子といふもなべくの傳い
へふもまりくといふもいふも男は名ふも子といふ
あまい、まが神武天皇は伊弉册石押分之子贄持之子を

つゝある。ちる。仁徳天皇、以及ふ。丸迹、口子、書紀應神、
御卷、壹岐、直真根子、仁徳、伊志、小茨田、連、衫子、又佐伯、直
阿能、履中、伊卷、小阿墨、連、濱子、雄畧、伊卷、伊佐伯
部、仲子、又雄波、吉士赤目子、又倭子、連、又水、江浦、嶋子、継躰、
伊志、小筑紫、君、葛子、又目頼子、安閑、御卷、子、稚子、直、欽明、以
卷、小中臣、連、鎌子、又葛城、山田、直瑞子、敏達、伊志、小吉士、金子、
又大伴、糠手子、連、又物部、贄子、連、推古、伊卷、小野、巨妹子、
たぐ、又、伊志、右の名、と、中、小石、押分、子、贄持、子、
古、伊志、書紀、と、小之、字、伊志、仁徳、伊志、の、衫子、の、訓、注、不、草、
呂母、能、古、と、又、阿能、胡、又、浦嶋子、又、中臣、系、圖、不、

鎌足公の祖父の名、方子、と、加多能子、とも、出、依、こ、持、こ、ふ、
よ、り、バ、と、皆、茶、子、と、之、を、と、て、よ、り、バ、と、出、依、こ、持、こ、ふ、
と、又、継躰、伊卷、目頼子、伊志、小梅、豆羅、古、と、伊志、バ、と、出、依、
と、伊志、バ、と、伊志、又、推古、伊志、小阿倍、長、鳥、と、伊志、人、
を、鳥子、と、伊志、又、敏達、伊志、小糠手子、連、を、崇峻、伊卷、子、ハ、
糠手、連、と、伊志、舒明、伊卷、中臣、連、弥氣、と、伊志、人、を、家、系、圖、
よ、り、御、食、子、大連、公、と、伊志、又、皇極、伊志、小巨勢、長、徳、太、と、
伊志、人、を、孝徳、伊志、小徳、陀、古、と、伊志、人、を、伊志、伊志、
出、依、子、と、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、
出、定、後、語、と、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、伊志、

ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
んふまきせし老づしつゝまじりてあふいふるも
たりてよびまきつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも

まきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも
ゆきつゝのちまきニまじつゝまじりてあふいふるも

ちりつて入るもいとこねり又かとうり陰陽をそのあまど
 いふこいづくもわづらひまづるそ中のみいづくは天地のあま
 やうも何れもその神のはらうをその時の新けくねひくねいぬるごと
 らふ人のあまのきまをそのあまのくねをかくとまづるしきふひいふま
 まづるかのふ人乃ねくひまていとくくくくくくくくくくくくくくくくく
 用公旦がくひも飯を吐かして賢人よをくくくくくくくくくくくく
 又きけを周る目といひく聖人の子けいすく先く河外我一沐
 三握髮一飯三吐哺起以待士猶恐失天下之賢人
 いつりりまきふねくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 糸思とむとそのもかりてしむる賢人を思へをきてはふ入くくく

其飯を吞ノドひてまげまをやうやまき出逢へむそねふどふ
 てはのむつせむといひてやまきまをくくくくくく吐出し人よ
 せふは何れもやまきまのあまのくくくくくくくくくくくくくくくく
 ぬくちひきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 むさざりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 藤巻成章とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ちりきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ちりかきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ろく進ぬるごとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 例の入りやうねくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

く御此ぬもどきまてぞとていふ人なりけりやうきしりばけ
ちまきわとみまわりのぬとけして又おどろうとせぬまもしけど
ろ乃しとてとぞとハきこう一人もままらわしてわらひくおど
ろひおまをばおのきむり此まこえまかきしとんやうしとぞ
おままきよまもあかきる文りの後まどまきけだむがここの
と多くみまいしやうに力のたてこまはとあわゆるハバこ
ましめまおるハバこまをまよふこの藤おまをまよふ
おわらむ又おまをまよふハバこまをまよふハバこまをまよ
ふのがうとよふおわらむとまよふハバこまをまよふハバこ
あまこはこハバこまをまよふハバこまをまよふハバこまをまよ

んふたたく集よりいぬまがむのやうにぬくんとまよふこ
とハバこまをまよふハバこまをまよふハバこまをまよふ
いひろいまはまもしけりぬえんおよめうとハバこまをまよ
ふかりとハバこまをまよふハバこまをまよふハバこまをまよ
ふまきたんぬらぬまもしけりぬえんおよめうとハバこまをまよ
ふ乃まはまもしけりぬえんおよめうとハバこまをまよふハバ
とせまのぬらぬまもしけりぬえんおよめうとハバこまをまよ
ふのかりとハバこまをまよふハバこまをまよふハバこまをまよ
ふまきたんぬらぬまもしけりぬえんおよめうとハバこまをまよ
ふ乃まはまもしけりぬえんおよめうとハバこまをまよふハバ

かみふ蓋ナガイといふ字ハおかくと稱をふしそかりてぞとぞ
家系ハおかくやふえやの源系葉集りし此あたはのそり
まるとわを考ふまはうとふをわすとふまもつひおむとや
らりてとてかくとわをきりといふとらゆはうひかり二の
おいしんかうふとむまはともきんまごしやわとてにがう
おとそとてともすふくきやうおとてこそハ郭といふ人を
るまといふまご今つづるもわハ日ガつくふちをうしてま
しふやわとてしとてまごしとてまふふちハまごしとてま
あはれといふまごしとてまふまごしとてまごかともいふ
しとてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
しとてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし

とて又まごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし
とてまごしとてまごしとてまごしとてまごしとてまごし

西宮記ハ馬子六人馬子四人をどくといひたりとあつまはる者
今たぞふまごしといふまごしなり

明月記の園基双六將騎等盤とつゝ將騎ハ將基乃と
おとす。園大曆の犬炊御門大納言入道同へ來有將基
興とわり。

ころやと浅おるといふや又おるび

同明月記の二位殿御發心地今日令發給とあり又
園大曆の春宮大夫瘡病未落居今日即發日也。

續本

同記の寛喜二年三月七日兩株八重櫻一條殿花漸
開永日徒然令分栽菊苗草不憚と云ふり續木とい
ふべしと云ふやと云ふきり。

為後日といふと立物といふ

今徳文のふくふ為後日とかく。應徳元年又永保三年
ねのの家地賣買券より仍為後日立新券まゝ仍為後
日相副本券等立新券如件をとりまゝ屋藏を
のこらひと云ふ物といふと云ふ永保三年の券も立
物屋振宇といふのみを野群載立の巻ふといふ。

やか

元長記の犬永五年二月二日云く相國寺有早鐘未聞子
細無覺束といふ

賣下

今昔ふせうそこの當名はうつくふ貴下と出さるわ
台記より足下をいふべきそはふ貴下と出さるわ
取ふらうしつわ

そはうつり症

同記小日来患鼻垂疾俄身温まよ依鼻垂不念珠但

今日無温氣也まよ鼻垂後始念珠夜前あごんり

風と川木の成つてやむ木那夜と夜前といふもそふ尺ゆ

せうらき

小き溝を伝ふせうらきといふる菱糸の紫糸下をふりみ
ら紫糸伝ふせうらきといふ川の浅きせうら秋ハ伝きき

後撰集に記さるる小流うづり無華山

きどとやいふといふとハ藤糸を補伝ふききといふ

とどおまの伝行らめきようハちうとと台記別記

次召家行朝臣賜比多櫻礼黄仰セテ云路頭定有寒

氣以之禦寒云くとと兵範記小久安五年十一

月十一日今日被行故姫宮周閉御法事云く布施

云く織物直垂故宮領御衣まよ保元三年二月九日

賀取のそら小男女相伴被入帳中下官覆直垂也

字治松を御所入へるゆむとさう小綿四五寸ハうら

しりあけりきけしきくもきくもゆきんきんきん
 ありきし直垂きりや縁をけりてきりきぬきぬき
 裏にききりきき又しりハきききりハや後後きり
 裏にきりきりハ綿をけりて裏にききりきりきり
 床端お及字河うくろり
 台記ハ布三反布二反ぬりたりきりきりきりきり
 ぬり

同記ハ四五位半靴右引層六位深沓無引層とあり
 右華仙無華仙
 右沓ぬりきりきりきりきりきりきりきりきり
 右きりきりきりきりきりきりきりきりきり

蟾蜍層ハカぬりきりきり

一日ハきりきり一切きりきりきりきり

中右記云嘉保三年三月十八日今日京中上下萬
 人一日之中書写一切經是有一聖人得夢想告進
 催人ハ於各家令書写則供養テ送聖人許者依テ為
 大善根聊所記置也とありきりきりきりきり
 書をきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 ころきりきりきりきりきりきりきりきりきり

又

一代要記あり建暦元年四月廿三日以一万五千

人僧侶一日一切經書寫供養導師前大僧正雅縁

おき侍り

うらな御座りまづのひらきもまふ番交けとどかまつことわり

針のみ

今依り針乃孔をみづとりしき蒙抄ふらむみり

つり耳はさしりや

ぬきしり

夫本系お後頼朝尾引とや花のかるとよと福ざせ
てあときもぬきしりてをぬるは買つ徳安藝とて多
そたは希はまざるまじぬとらとよは乃福ざりよ今め

かみやに何ふのう家又のうつまごりやまごし

松糸くつ紙

園大曆おいし康永三年二月廿一日今日予上

大臣表状也草事云々尋常搦原スナハラ二枚不加礼紙二枚先

何如本儀事高檀紙可加礼紙也但搦原又常事と

何は松糸といふ紙とてとらとよは乃福ざりよ今め

らよどえあつととまか

おどはしり

いしり糸係おしり匠おしり物らあかろしりまお乃
おしり匠をバおどはしりとてとらとよは乃福ざりよ今め

おしあもあつらふ。史記の灌嬰とつが傳ふ。斬樓煩將
五人。つ了注ふ。樓煩縣名。其人善騎射。故以名射士。
為樓煩。取其美稱。未必樓煩人也。

ちやゆといふ

大鏡より堀川の扱政乃ちやり給ひし時ふ。此東三條殿も
つらきまことぞりもさき給ひしといふ。かくいふと
時ふまことつらき。ちやゆと業ゆと。すまひいふと
つらき。ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。

下向

あつらふとてあつらふ。下向といふ。中書は書たみら。

く還向とまると。御まると。東か下向。筑紫か下向。まると
ちやゆと。まると。下向といふ。ちやゆと。ちやゆと。

但馬の城のつら

増後ふ。安嘉門院。丹後のつら。ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。
ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。

東宮侍交信

増みみ。後守。まると。いふと。東まふ。ちやゆと。ちやゆと。
ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。ちやゆと。

ぎのぬりりぎ。くびぎをえははこしちだ。きんみのぬうく衣のく
のしきおろしき。きつじをかりけしき。くも。倍。お
十二むくとつちかばつ二のぼぎお。ぼりのぬひとくあお
あつよきおらぬ目りや。つらむ。

伊勢の文といつらむ。

同じぬふ。くふのせもほと。事申お公侍し。りえき乃
下がき。ぬあは文乃り。て。をくにあろく。り。くや。えい。
めく。から。ちるをせん

兵範記小保元三年三月廿二日。石清水臨時祭の舞人
の装束。摺袴立津とつら。今。す。も。つ。あ。股立や。

又同祭の使の装束。小著。有文。下襲。縮緬。綾。袴。等。や。り。
え。く。り。縮緬。ハ。今。ね。す。も。つ。あ。ち。る。を。せん。ち。る。べ。り。但。一。着。を。
ち。ど。せん。し。つ。ひ。む。を。ち。り。せん。と。ハ。此。も。つ。あ。せ。り。

伊勢勅使のそと人の取

同書小仁安三年十二月廿一日。伊勢大神宮炎上り
つらして。同月勅使。左大辨雅頼。卿發遣。その人取。勅使
大辨子息一人。從十一人。前駢六人。從各侍五人各從
十雜色六人。從各舍人四人。人夫卅人。右大史二善
章負。從卅人。史生盛久。同兼康。從各卅人。馬各五疋。
官掌頼兼同前辨侍二人。從各五人。馬各二疋。使部十

の暦本^{コヨミナキ}ふ神よーとあるをハモゆるべし又ハ日く日ぬど
日^コよたわーき^コ海^コき^コさ^コる^コこと^コを^コし^コゆ^コり。
きぬ^コら^コり^コ海^コぬ^コど^コ。

地^コ録^コの^コ物^コの^コ中^コふ^コき^コて^コふ^コき^コう^コと^コき^コと^コん^コて^コ時^コも^コき^コぬ^コの^コが^コら^コ。
い^コづ^コい^コち^コぬ^コぎ^コが^コら^コを^コか^コぶ^コ事^コて^コも^コう^コり^コい^コや^コう^コい^コま
か^コら^コゆ^コく^コ時^コも^コき^コら^コと^コは^コど^コぬ^コも^コふ^コん^コい^コり^コも^コき^コぬ
か^コら^コぬ^コハ^コぬ^コぐ^コを^コや^コま^コし^コと^コし^コも^コり^コ也^コ。

ありらるんみ

俗^コの^コこと^コも^コふ^コと^コる^コく^コへ^コ親^コき^コと^コい^コふ^コと^コも^コり^コ日本^コ紀^コの^コ欽^コ明^コ天皇^コ
の^コ法^コも^コふ^コ調^コ吉^コ師^コ伊^コ企^コ難^コとい^コふ^コ人^コの^コ新^コ羅^コ王^コ唱^コ我^コ臆^コ胆^コと^コ

いひたりてんしう

國守神詳

い^コづ^コ志^コ那^コの^コ日^コ記^コい^コく^コら^コづ^コよ^コう^コ人^コき^コら^コと^コ神^コ拜^コとい^コふ^コ。
い^コづ^コあ^コの^コうち^コり^コき^コい^コふ^コい^コら^コに^コ苦^コ後^コ系^コ孝^コ標^コの^コ東^コ國^コ乃^コ玉
目^コお^コたり^コて^コ下^コア^コが^コ件^コより^コい^コび^コる^コせ^コと^コし^コむ^コハ^コ國^コ日
臣^コより^コり^コて^コハ^コま^コづ^コ部^コ目^コの^コ神^コ社^コと^コい^コふ^コ事^コと^コい^コふ。

そごへんしう

イ^コ取^コ物^コ所^コは^コい^コつ^コう^コは^コ何^コも^コ人^コを^コそ^コめ^コあり^コが^コや^コも^コめ
の^コう^コい^コふ^コよ^コる^コべ^コい^コふ^コに^コり^コり^コり^コと^コも^コハ^コ俗^コの^コ何^コか^コを
ら^コづ^コい^コこ^コよ^コね^コい^コら^コる^コ事^コは^コい^コふ^コ事^コと^コい^コふ^コ事^コと^コい^コふ

中國

山陰道と陽道はるむり中国とつらへり。元慶二年二月三日は官符ふ伏尋物情陸奥出羽之在絶遠尚限五年因幡出雲之居中國何得六年とわり類聚三代格りのとらふ。

あまはらびい
つらへり中国とつらへり。元慶二年二月三日は官符ふ伏尋物情陸奥出羽之在絶遠尚限五年因幡出雲之居中國何得六年とわり類聚三代格りのとらふ。
あまはらびい
つらへり中国とつらへり。元慶二年二月三日は官符ふ伏尋物情陸奥出羽之在絶遠尚限五年因幡出雲之居中國何得六年とわり類聚三代格りのとらふ。

あまはらびい
つらへり中国とつらへり。元慶二年二月三日は官符ふ伏尋物情陸奥出羽之在絶遠尚限五年因幡出雲之居中國何得六年とわり類聚三代格りのとらふ。

又吾備大なる名
政事要畧小貞觀格をかくしていづく右檢太政官去天平神護二年九月十五日格備大納言正三位吉備朝臣真吉備宣奉勅者とく。一代要記やまみ真吉備とわり。ちりたる此大長持無君を葬給つる墓誌を掘つてよむ。真備とわり。志徳とつらへり。よむ。ハ。まき。バ。とよむべまなり。

狐はうし

中原康富記云應永七七年九月十日丙子今朝室町殿醫師高天被禁獄父子弟等三人也云々此間仕狐之沙汰風聞然而昨日於御臺御方仰驗者被加持之處二足自御所逃出則被縛件狐之後被打殺依此事高天が狐ヲ奉詛付之條露頭云々仍今朝被召取云々晝程又被召取陰陽助定棟朝臣昇モ仕狐之由有虚説云々末代之作法淺間敷々同卜月九日甲辰後聞囚人高天昨日被流讃岐國俊經朝臣同國被流之云々是等皆狐仕之輩也

伊弉諾命生於三山縣麻郡大隅人の母を依代長くしつゝ巨記云享德四年正月九日今曉室町殿姫君誕生也御袋大館兵庫頭妹也

後鳥羽天皇伊諱のよき

後鳥羽天皇伊諱尊成歷代編年集成云夕カヒラレ候字附あり成平也といふまじきべし

まさまけの装束抄ふりまのゆんごもつゝ又みまはたんとふかきも南ありてふりまもしりつゝ今うり納戸もろとねるんじ

ついでに

俗に云ふ。銀がいの。銭がいの。或はいくらをくらふ。おどろけ。けい
最といふ。細。小右記。ふ。洪米千石許。可入。欽と云ふ。源氏物語
ふ。昭入。ふ。お。言に。く。あ。ゆ。と。足。あ。る。目。の。い。ぬ。り。て。ま。ま。
あり。ら。と。俗。ふ。む。ま。が。い。と。い。ま。ま。と。い。ま。の。ろ。ろ。り。ま。や。い。て。
ま。ま。し。う。ま。り。ろ。ろ。の。近。き。ま。ま。俗。説。小。没。字。成。用。係。け。ま。ま。
曰。ド。と。い。ふ。

お、ゆきつきて。陰。ふ。食。成。修。了。著。と。い。ふ。仁。治。三
年内。宮。假。殿。記。ふ。奉。遷。使。祭。主。從。三。位。神。祇。權。大。副。

大中臣隆通。文刻。許。参。宮。云。御。息。所。經。繼。神。主。之
宿。館。長。官。沙。汰。進。落。付。之。飯。酒。と。あり。

年。維。章。と。い。つ。ま。あ。し。や。れ。う。ま。し。和。學。井。と。つ。あ。り。の。お。い。せ。物
俗。に。喜。日。は。星。り。あ。る。り。と。い。ふ。知。の。ま。ま。と。い。ふ。作。者
と。い。ふ。り。異。邦。乃。書。に。知。杭。州。知。袁。州。と。い。ふ。知。の。字。
は。う。さ。ま。と。い。ふ。此。方。は。人。と。文。字。の。傍。及。と。い。ふ。知。の。字。
ぬ。を。お。り。と。い。ふ。讀。は。の。夏。ま。る。ま。と。い。ふ。知。の。字。
つ。う。い。ふ。お。い。の。と。い。ふ。志。流。と。い。ふ。傍。及。と。い。ふ。と。志
ら。ぶ。と。い。ふ。こ。の。か。の。ま。ま。と。い。ふ。右。ま。ま。と。い。ふ。下。ま。ま。と。い。ふ。

ときや中しし。まや家上つ代より。うきうきあて。ごうふ知事。侍傍及
 をうら。べし。もつ。何う。ハ。何う。が。あ。な。志。流。と。り。あ。言。ハ。此
 仰。也。侍。及。の。ま。ち。を。し。ま。ご。を。廻。の。言。れ。ま。を。ば。う。く。と
 ち。ご。ご。も。が。漢。字。の。義。を。の。も。ご。へ。ご。み。ご。り。お。る。あ。と。り。あ。ご。の
 る。ご。い。ご。ご。や。の。ほ。ご。い。

柳枝松枝を文臺とせしむる事

明日記。小建永二年三月五日。賀茂哥合。今日。給題。
 七日。依。有。雨。氣。御幸。被。念。云。く。次。入。御舞殿。御前。敷。
 圓座。大納言。依。召。候。御前。次。召。哥。人。有。家。取。哥。合。參。
 上。敦。經。持。參。柳。枝。置。御前。為。文。臺。技。本。向。御。社。方。以。

木葉面可為上之由有仰置哥合於其上云々幸上
 御社次第如前以攝殿為御取手依召取哥合參上
 敦經持參松枝為文臺如前讀上各退下

姫君あむい君中のあむいあむい

い。ん。へ。公。卿。あ。む。い。の。む。ま。あ。ら。れ。ほ。つ。で。を。り。ま。ご。一。の。姫。お。る。ま。
 姫。君。も。心。大。君。も。心。い。い。二。を。中。に。あ。む。い。の。い。三。を。り。下。ハ。つ。ぎ。く。り。
 三。の。あ。む。い。の。あ。む。い。い。ア。り。二。人。を。も。い。く。り。あ。む。い。二。あ。む。い。を。バ。中
 の。あ。む。い。の。あ。む。い。も。姫。君。と。ハ。一。あ。む。い。を。い。い。く。あ。む。い。の。あ。む。い。の。あ。む。い。の。あ。む。い。の。
 ぐ。み。あ。か。く。あ。む。い。新。猿。樂。記。と。い。ふ。あ。む。い。の。あ。む。い。の。あ。む。い。の。あ。む。い。の。あ。む。い。の。あ。む。い。の。
 の。十。あ。ん。乃。女。乃。こ。い。つ。る。小。大。君。中。三。君。は。除。五。君。云。君

らる海に... 書と今もつりぬる
 く... 又門扉形どやうに...
 と... びく...
 らく...
 も...
 お...
 む...
 宿老... 名主

京大板... 町... 長... 宿老...
 長... 吾妻... 田舎...
 名主... 糸... 東...
 え... 中... 村...
 い... 恒... 永...
 や...
 病...
 今... 文書... 病...
 病...

あふ一人二人あどてそまべくさかーねぐくハみる痛てあゆる
しほしバそま成りりもてハいそでもあなべくあぢあをそこれ
をむくみぞとせけてろも戦ひく死ゆるりのくまうり
なり痛れを痛れとていつし時のあらしのまねるべし
あらししとて
俗く女あどのねつりかぬまをさるは女あどくといふこ
とをわり獲衣のあ所ふ或あらしの女をねとみく車ふのこ
てあさるまをあらししもてくかぐらるがらあさるまを
あをそとていり
京と獅子舞は鼻

神社ふり獅子かいらといふりのおハいふぐこの物うるへし
白氏文集西涼伎詩ふ西涼伎假面胡人假獅子刻
木為頭線作尾金鍍眼暗銀帖齒奮迅毛衣擺雙耳
如下從流沙来中萬里紫髯深目兩胡兒鼓舞跳梁前致
辭云くといふことばあひもあはるそのまかりつ
日ト又王の鼻といふ物天狗面といふことば猿田彦神社の
形といふことばとことばは胡兒のうとあるべき貴徳
の舞は面まうく王の鼻江家次第興福寺供美良中
法勝寺御塔會ねふ師子舞の事とてと園大曆ふ
師子舞徳太男といふハ此舞を業とてとる者

かひさふよる

女の洞より人の移るるが如きと云ふかひさふといふは伊勢を
よすハお初めなるといふはつづまにそ寝ることをよるといふは
夜なるといふことと云ふ著聞集ハ月をといは免せていふ
あはれ増後ハ赤ハいづくにおよぞとぬ花のやういふことハ
文身の訓
かく書ふ文身といふはみまのやうごとと訓す夫本抄後松
船のまふ事いふことと云ふの義系志に記してあるつづふは
まのまのうしと云ふことと云ふ事記系切大皇女は花より文身
のよる月と云ふなり

今の子あまといふものも餌取を訛る名に穢多とかくハ俗
のよかりらりて和名抄ハ屠兒和名惠止利屠牛馬
肉取雁鳥鶏之餌之義也殺生及屠牛馬肉取賣者也
とわり翻譯名義集といふ書に旃陀羅此云屠者法
頭傳云名為惡人與人別居入城市則擊竹自異人
則避之といへるハ大竺の書に記す此は今のそれ也
といふことと云ふなり

足袋

俗にいふ足袋と和名抄ハ單皮履云々今按野人

以_レ鹿_ノ皮_ヲ為_リ半靴_ニ名_ヲ曰_ク多鼻_宜用_ニ此_ノ單皮_ニ二字_乎コガリ
うぎぬき門

を根とぬくして門乃やううぬとうぎぬきとつやを狭
衣の物送り門あぶらけてしゆらぎぬきとつやぬきを
うぎぬきとつやう八興入眼あ入ぬ市限筆竹自異入
うぎぬきとつやう八興入眼あ入ぬ市限筆竹自異入
よ足のゆきぬき俗名ふぶるいとつやいせぬどふかい
ぶらいつら此を昔丹集ふぶぎとこが今好の於葉にむ
うとしてせをよあありかいたもまうゆ伊勢が葉ふぶと
うぐお思ふまきわつうば急まかひあゆらさるとつれとり

よ。此も夫本あふハ之四の句も枕あかいつらさす
うぎぬきとつやう八興入眼あ入ぬ市限筆竹自異入
人ふあす時ううばとつやう後換糸別の於伊勢さ
らばよとこのまううばあいつらせばぬらぬら袷あす
うぎぬきとつやう八興入眼あ入ぬ市限筆竹自異入
今あゆのううばりううばぬきとつやう今糸集あす下
あつやうぬきとつやうかきつひ山あはえうと人とぬき
うぎぬきとつやう八興入眼あ入ぬ市限筆竹自異入
人乃あすぬき掃うばいむと万葉集あもす九のあす
掃も又うぎぬきとつやうかきつひ山あはえうと人とぬき

と云ふことありしに、菅原贈太政大臣の書齋記
小又朋友之中頗有要須之人適依有用入在簾中
更科日記より、いふべきやうにて、秋より和泉のくさうふら
ら、わらう今姑子用ありし、後撰系雜二小枇杷石丸
より、ゆるし、櫛の柴成りしを、竹久、後撰系雜より、系條馬系
は、いふべきやうにて、いふことありし、いふことありし、いふ
べきやうにて、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
急要退下宿廬、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
いふ急用ありし、
いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、

言荷小附といふことありし、後撰系雜、小年の救つまむことありし、
いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、

北野の山脈といふことありし

言衣ありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
此二を姑子、小中の山脈より、鴨、長、四、五、六、七、八、九、十、
一、二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、
十一月、十二月、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
次、いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、
の言、いふことありし、いふことありし、いふことありし、いふことありし、

つらねのうらなふらふらと家でもし。世あまの糸ととも
なびたまふけい。西のつらねのうらなふらふらととも。

後のはに鶴をいつさす。

今ねせお後のはに。おま。多くねし。鶴をけう。海。縛つら。し。
後。を。桑。野。お。伊。勢。お。年。も。と。お。お。い。の。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。
し。が。け。り。乃。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。へ。り。は。る。け。ま。ね。と。の。お。お。か。と。い。と。
せ。け。ら。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。の。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。

後のはに鶴をいつさす。
今ねせお後のはに。おま。多くねし。鶴をけう。海。縛つら。し。
後。を。桑。野。お。伊。勢。お。年。も。と。お。お。い。の。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。
し。が。け。り。乃。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。へ。り。は。る。け。ま。ね。と。の。お。お。か。と。い。と。
せ。け。ら。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。の。う。ら。な。ふ。ら。ふ。ら。と。と。も。

